

英詩における賛美歌・聖歌・民謡

実 村 文

Auld Lang Syne: A Song's Journey through Three Continents

MIMURA Aya

This paper attempts to examine the historical factors which brought a Scottish folk song to the East Asia. When the new system of public education started in Meiji era Japan, many Western folk songs were included in its music textbook. “Auld Lang Syne” was one of those songs. It had traveled from Scotland through Britain and the United States.

The poem was written by Robert Burns (1759–96), the “national” poet of Scotland, whose self-acted image as a plowman-poet took well with the 18th century Edinburgh and London readers. Burns took part in the Scottish Vernacular Movement, wrote many poems rich in Scottish dialect, and devoted his last years to collecting Scottish folk songs. At that time, almost one century after the Act of Union, the “Scottishness” was repressed by the English, or rather, not yet distinctly established. Scottish people were struggling for the original “national character.” It was this historical background that set up Burns as an embodiment of the “Scottishness.”

The United States also welcomed him ardently. It was indeed sincere enthusiasm, but at the same time, the critics there who were not yet confident of their own “national” literature were following the trend in the Old World. And his image as a poor but independent patriot must have seemed a suitable idol for the land of “the frontier spirit.” In a word, the United States found, even “created,” its own ideal in the figure of Burns.

Then an American music teacher named Luther Whiting Mason (1818–96) introduced “Auld Lang Syne” to Japan at the end of the 19th century. Here the tune was cut off from Burns’s lyrics and given entirely different Japanese words. The song of friendship was changed into a nationalistic lesson, encouraging children to work hard and defend well their country’s (indeed newly-built) territory. It was, so to speak, used as a tool to inculcate the “nation consciousness” upon young people’s mind.

However, here happened an interesting reversal. “Auld Lang Syne,” now a Japanese song “Hotaru no Hikari” (The Glimmer of Glowflies*), was brought to the other parts of the East Asia as Japan expanded its imperialistic rule. It was taught, for instance, in the Korean Peninsula as a part of the assimilation program. Then the Korean people secretly turned it into a Korean song in praise of the flower of althea, the symbol of their own country. This variation was widely sung in the anti-Japanese movement.**

The history of “Auld Lang Syne” makes us reconsider what a national character is. The song has been made into a representation of various ethnicities. In other words, a national character is not some-

thing given a priori; rather, it is a “production.” And another important lesson the song gives us is that music can be a tool of repression and control, but at the same time, support resistance and bring about liberation.

* Glowflies here are the symbol of diligence. “The *hotaru* (firefly) has long been associated in Japan with the Chinese legend of a poor scholar who, unable to afford lamp oil, studied by the glow of fireflies.” (*Encyclopedia of Japan*, Tokyo: Kodansha Ltd., 1999)

** The lyrics are now sung as the national anthem of the South Korea with a new tune.

英詩における賛美歌・聖歌・民謡

実 村 文

「蛍の光」考

賛美歌の歴史に関しては、英文学・宗教学・歴史学・民俗学等々の見地から、すでにさまざまな考察および史料編纂が行われている。しかし、それらは各自独立した研究となっており、そのすべてを統括するような視点に立った研究は未だなされていない。一例を挙げれば、明治日本で創生された「唱歌」には、スコットランドやアイルランドの民謡がイギリス・アメリカを経て移入されているのだが、それらが日本の唱歌となった「経緯」について語られることはあっても、それにはどのような「歴史的要因」が作用していたかについて言及されることはまずない。そういった因果関係の検証を比較文化史の見地から試みるのが、この研究の当初の目的であった。

2年間という時間的制約もあり、対象を1つの「歌」にしぼって、事例研究を試みることにした。選んだのは、日本でもなじみの深い「蛍の光」という歌曲である。興味深いことに、この作品の伝えられてきた道筋には、欧米および東アジアにおける近代化の過程が、いわば象徴的に顕れているのである。

1. 原詩の成立

現在もなお、世界各国で別れの歌として親しまれている『蛍の光』であるが、原曲はスコットランド民謡であり、作詞者はロバート・バーンズ Robert Burns (1759-96) というスコットランドの「国民的」詩人である。もとの詞“Auld Lang Syne”(過ぎし日)は、別れというより再会の歌であり、旧友と昔を懐かしみつつ杯を酌み交わす、という内容で、スコットランド方言を豊かに取り入れて書かれている。

AULD LANG SYNE

SHOULD auld acquaintance be forgot,
And never brought to mind?

Should auld acquaintance be forgot,
 And days o' lang syne?
 〈Chorus〉 For auld lang syne, my dear,
 For auld lang syne,
 We'll tak a cup o' kindness yet,
 For auld lang syne.

We twa ha'e run about the braes,
 And pu'd the gowans fine;
 But we've wander'd mony a weary foot
 Sin' auld lang syne.

We twa ha'e paidlet i' the burn,
 Frae morning sun 'till dine:
 But seas between us braid ha'e roar'd
 Sin' auld lang syne.

And there's a hand, my trusty feire,
 And gie's a hand o' thine:
 And we'll tak a right gude-willie waught,
 For auld lang syne.

And surely ye'll be your pint-stoup,
 And surely I'll be mine;
 And we'll tak a cup o' kindness yet,
 For auld lang syne.

ふるきよき友 忘ることなく
 心にとはに とどめたし
 ふるきよき友 忘ることなく
 過ぎし日心に とどめたし
 〈合唱〉 過ぎし日のため 友よ
 過ぎし日のため
 懐しのグラスを
 過ぎし日のため

われらふたり 山かけまはり
 美しきひなぎく つみ集めぬ
 巢立ちしより いばらの道
 われらたどりぬ 幾年月

われらふたり 川にあそびぬ
 朝早くより 日暮れまで
 巢立ちしより 海に遠く
 隔てられぬ 幾年月

さらば握手を こころの友
 さらば握手を まことの友
 楽しきグラス いざ傾けむ
 過ぎし日のため 思ひ出のため

君は君の グラスをいざ
 われはわれの グラスをいざ
 友と友との グラスをいざ
 傾けたまへ 過ぎし日のため

(岡地嶺,『ロバート・バーンズ 人・思想・時代』,開文社出版,1990年 所収)

バーンズ自身は複数の書簡の中でこの作品を「断片」と呼び、「古い時代の古い歌であって、これまで印刷されたこともなければ、原稿として残されたこともありません。古老が歌うのを書きとめました」と言っている¹⁾。自分のオリジナリティを主張せずに、スコットランド土着の民謡であることを強調しているのである。たしかに先行する詩は複数存在する²⁾。しかし彼が自分の詩に推敲を重ねていたのは事実で、少なくとも三つの版が残っている。バーンズはこの作品がなかなか出版者にとりあげてもらえなかったため、書き直しを重ねていったのである。また、初めの版のつけられていた曲が、すでに別の歌詞をつけて同じ歌曲集に収録される予定であることがわかったため、変更された曲が現行のものであると言われている。

バーンズの人となりについて述べておくと、彼は貧農の七人兄弟の長男として生まれ、母からスコットランドの伝説や古謡を習ったという。学校教育はほとんど受けておらず、父の農作業を助けるかわら独学で詩才を磨き、20代に詩人としてデビューして、一躍エディンバラ社交界の寵児となる。

彼の詩が瞬く間に人気を博したのは、自然や郷土愛、恋愛や庶民の哀歓といった親しみやすい主題ばかりではなく、それを素朴で力強いスコットランド語で表現したことにあると言われる。ところで

「スコットランド語」についてであるが、当時すなわち18世紀末には、イングランドとスコットランドの合同（Union）が成立しグレートブリテン連合王国が誕生してからすでに1世紀弱を経ており、同国内では政治的に優位である「イングランド語」が「標準語」とされ、「スコットランド語」は「亜流」「方言」といった位置に貶められていた。ただし、同時代にも独自性を保っていた「アイルランド語」に比べ、スコットランド語の英語への同化がより進んでいたと考えることについては疑問が残る。むしろ、「十七世紀後半になるまでは、スコットランド高地人という独特の民族は存在しなかったのである。彼らは単にアイルランドからあふれ出た人びとであった。（中略）十七、八世紀のイングランドによる圧政の下においてさえ、文化的にいて、ケルト的なアイルランドは史上由緒ある民族集団として存続したが、ケルト的なスコットランドはせいぜいその貧弱な妹分にすぎなかった。つまりそこにはなんの独立した伝統も存在しなかった—しえなかったのである。高地地方独自の伝統を創造すること、およびその外的な表象を伴った新たな伝統をスコットランド民族全体に負わせることが行われたのは、十八世紀後期と十九世紀初期のことであった³⁾という記述のほうが正確であろう。この伝統復興—あるいは「創造」—運動の一つが、スコットランド語の（再）活性化をめざした上着語運動 Vernacular Movement である。その一端を担うかたちで、バーンズは英語とスコットランド語の両方で書く詩人として自分を確立していったのである。

また、彼の生前から定着していた「独学の農民詩人」というイメージも、もちろんまったくの虚像ではないものの、「自然児」の「天才」という同時代のロマン主義における一つの理念形を、みずから演じていたという面も否定できない。（例えば彼の第一詩集『おもにスコットランド方言による詩集 *Poems, Chiefly in the Scottish Dialect* (the Kilmarnock edition と呼ばれる版)』（1786）の序文でバーンズは、自分の教養の低さを故意に強調している。）この「自演」が効を奏して、カーライルを初めとする著名な文人たちの絶賛を受け、バーンズは一躍時の人となっていく⁴⁾。

しかし、名声はそれに見あうだけの富を彼にもたらしはしなかった。この時代には、従来の「パトロン」制度が崩壊し、物書きは「契約」subscription で購読読者を得て、そこから収入を得るという制度が確立していくのだが、バーンズは筆一本で生計を立てていくには至らなかった。経済状態はつねに苦しく、後に農業と税官吏の仕事を両立させようとするが失敗に終わる。そのような暮らしの中で、エディンバラの出版者ジョンソン James Johnson による『スコットランド歌謡集 *The Scots Musical Museum*』の編集（1787～1803）に協力する。困窮にありながらバーンズはこの作業を祖国への奉仕と信じ、頑なに報酬を拒否したという。全6巻から成るこの歌謡集の、第5巻に“Auld Lang Syne”が収められている。発行されたのは1796年、バーンズがリユーマチ熱で世を去ってから半年後であった。

没後まもなく彼はスコットランドの国民的詩人として祭り上げられていく。1810年前後に⁵⁾、「バーンズ・ナイト」という誕生祭が確立する。彼の誕生日の1月25日にスコットランドの郷土料理「ハギス」（羊の胃袋に内臓を詰めたもの）を食べ、あるいは詩人同士で集まって詩を読み、バーンズを称えるという祭りであって、現在でも祝われている。また“Auld Lang Syne”に関しては、スコットランドでは大晦日に夜を徹して民謡に合わせて踊り（スコティッシュ・ダンス）、年明けと同時に、

皆で手を取りあって輪になり，“Auld Lang Syne”を歌って閉会するという習慣が、やはり現在も続いている。

このようにしてバーンズは、生前から死後をとおして、「スコットランド性 Scottishness」というものを体現する存在になっていったのである。

2. スコットランドからアメリカへ

ところで、バーンズは、スコットランドの外ではどのように受容されていったのだろうか。実はイングランドはもちろん、アメリカ合衆国でも同時代から評価は高かった。例えば『おもにスコットランド方言による詩集』はエディンバラでの出版のすぐ後、ほぼ数週間遅れただけでアメリカでも出版され、好評を博している。ワシントンなどの著名人が愛読していたというエピソードにも事欠かない⁶⁾。

興味深いのは、アメリカにおける評価が、各詩集ごとに見ても、ほぼ英国での評価をそのままなぞったかたちになっていることである。「独学の農民詩人」という像も反復されている。これは決して単なる偶然ではなく、未だ自国の文学環境に確たる自信のなかったアメリカの批評家たちが、長い伝統をもつ「本国」である英国の批評を踏襲しているのである⁷⁾。さらには、英国でもバーンズ批評は主にスコットランド人の文学者が担当していて、イングランド人はあまり「口を出さない」という風潮があった（現在もあるが特にその頃は強かった）⁸⁾。「スコットランド人のことはスコットランド人にしかわからない」といった本質主義が、不文律として働いてしまっていたと言える。

こうして、アメリカ合衆国では、スコットランド人批評家による英国内でのバーンズ評価が、「二重に」オーセンティックなものとして踏襲される、という図式が確立されていく。逆に言えば、このようにアメリカで受容される過程で、スコットランドの詩人であり、かつ「イギリス」ロマン派の先駆者という、バーンズの世界文学史上における位置付けが確定していくことになるのである。

一般読者について言えば、合衆国でバーンズを歓迎したのは、祖国を懐かしむスコットランド系移民に限られなかった。もちろん、スコティッシュ・コミュニティは合衆国内各地にあり、前述したように現在に至るまで毎年バーンズ・ナイトが祝われているのだが、例えば1859年1月25日、ボストンでの生誕百年祭で、バーンズを称えるスピーチをしたのが、かのエマソン Ralph Waldo Emerson (1803-82) であった。ここでエマソンは、バーンズの詩を「人類の財産であり慰め the property and the solace of mankind」と呼んでいる⁹⁾。アメリカのバーンズ熱は大変なもので、別の批評家などは、バーンズの、個人の自由に対する愛は、スコットランド性を越えてまさにアメリカ的である、とまで言っている¹⁰⁾。こうなると、バーンズという像figureは、スコットランドのものであり、英国のものであり、かつ人類皆のものであり、ゆえに(?) アメリカのものであるということになってしまう。

この奇妙な「搾取」については、次のように考えることができる。すなわち、いまだ「国民文学」創設の途上にあった当時のアメリカには、英国の文学をそのまま輸入しながらも忸怩たる思いが蔓延していた。バーンズが英国内で高い評価を受けたため、合衆国内でもすぐさま評価が高まったことは

先に述べたが、人気の理由はそれだけではなかっただろう。従来のヨーロッパの「高尚」な詩文に、あえて「素朴」な農民の言葉を武器に立ち向かうバーンズの登場は、同じ開拓者として旧大陸に対峙するという立場をアメリカの読者に与えたため、熱狂的に歓迎されたのではないだろうか。つまり、アメリカはバーンズのなかに、理想とする自己像を見出した——否、「創り出した」のである。

3. アメリカから日本へ

バーンズはさらに太平洋を越えて、アジアに向かう。彼のほかの作品数編とともに“Auld Lang Syne”が日本にもたらされたのは、明治期のことであった。

日本への紹介者は、合衆国出身の音楽教育家、ルーサー・ホワイティング・メイソン Luther Whiting Mason (1818-96) という人物である。メイン州に生まれケンタッキー、オハイオなどで音楽教師を勤めたのち、実績を買われてボストンに招かれる。ボストンでは1830年代に学校音楽普及運動が始まっており、メイソンはそこで活発に音楽教育をおこなううちに、新生明治日本の文部省から派遣されて在米中だった伊沢修二 (1851-1917) と出会う。この伊沢との縁が機となって、メイソンは1880-82年の間、お抱え外国人として日本に滞在することになる。メイソンの責務の一つは、1879年に設立された、伊沢が長をつとめる調査委員会、音楽取調掛（現在の東京芸術大学音楽学部の前身）の一員として、日本初の国定音楽教科書、『小学唱歌集』を編纂することであった。

明治期の学校制度は、1872年（明治5年）の学制公布をもって開始された。「唱歌」という教科もこの時、小学校（各4年の下等小学と上等小学）に置かれたが、読み書き算などちがって「当分是ヲ欠ク」と但書が添えられていた。いまだ「唱歌」あるいは「音楽」教育の理念も確立しておらず、またその任を担う人材もほぼ皆無だったのである。ボストンで「公教育としての音楽教育」に触れ、音楽を媒介に人民の精神を統括することの重要性を痛感した伊沢は、合衆国から帰国後、国楽 national music の設立を急務として文部省に上申した。音楽取調掛の創設はこの上申を受けたものであった。

メイソンや伊沢らの努力を結集して完成された『小学唱歌集初編』（1880）には、「見渡せば」（原曲「むすんでひらいて」）、「うつくしき」（原曲「スコットランドの釣鐘草」）などに混じって、「蛍の光」が「蛍」という題で収録されている。メイソンが採用する歌を選んだ基準は曖昧で、恣意的と言えるほどだが、歌の出典の一つが、彼がボストン以前の音楽教師時代に用いていたドイツ民謡中心の教科書『国民学校歌唱教育実用教程 Praktischer Lehrgang für den Gesang—Unterricht in Volksschulen』（ホーマン Christian Heinrich Hohmann というドイツ人音楽家の編纂による）であることはわかっている。しかし、そこから外れる一群の曲があって、「見渡せば」「うつくしき」「蛍」などの出典はまだ不明である。ただし、“Auld Lang Syne”の曲は「蛍」だけでなく、『小学唱歌集』と同年に出版された『讚美歌并楽譜』に三つの讚美歌に付されて収められていることも見逃せない¹¹⁾。

日本語の「蛍」=「蛍の光」の作詞者は、当時東京師範学校教員でありメイソンとも面識のあった稲垣千穎（ちかい）という人物である。メイソンは、日本の外人居留地で讚美歌として歌われており、

『讃美歌并楽譜』に収録される予定の“Auld Lang Syne”の曲を稲垣に見せ、詞をつけるように依頼したのではないかという説もある¹²⁾。つまり、唱歌として小学校教育に導入されるのにわずかに先がけて、この曲は讃美歌のメロディーとしてすでに日本上陸をはたしていた可能性があるのである。

蛍の光

はたるの光、窓の雪。
書よむ月日、重ねつつ。
いつしか年も、すぎの戸を、
明けてぞ けさは、別れゆく。

とまるも行くも、限りとて、
かたみに思う、ちよろずの、
心のはしを、一言に、
さきくとばかり、歌うなり。

筑紫のきわみ、みちのおく、
海山とおく、へだつとも、
その真心は、へだてなく、
ひとつに尽せ、国のため。

千島のおくも、沖縄も、
八洲（やしま）のうちの、守りなり。
至らんくのに、いさおしく。
つとめよ わがせ、つつがなく。

（金田一春彦，安西愛子編，『日本の唱歌（上）明治篇』，講談社，1977年 所収）

1945年の敗戦以後は歌われなくなってしまった3, 4番の、とくに4番が興味深い。この歌詞が収められた『小学唱歌集』の出版が前述のとおり1880年、前年の1879年は琉球処分の日であった。日本の領土に暴力的に組み込まれてわずか1年後、沖縄を当然のごとく大日本帝国の一部として記憶に刻む歌が全国の学童たちに与えられたことになる。「蛍の光」という唱歌は、「領土」という概念や、それを守る「国民」としての自覚を少年少女に教えこむ道具の一つとして、作られ、用いられたのである。無論、それはこの歌に限ったことではなく、明治唱歌は基本的にこのような「小国民の生産」に向けて作成されたものだったといってもいいだろう¹³⁾。

ただし、教育史上、とくに明治唱歌だけがゆがんだあり方をしていたわけではない。そもそも教育という行為は、「児童の個性を伸ばすこと」と「児童に規律を覚えさせること」という、相反する二面をもつものである。集団教育ともなればなおさらである。メイソンを日本に送り出したボストンの音楽教育自体が、18世紀スイスの教育改革者ペスタロッツ Johann Heinrich Pestalozzi (1746-1827) の影響の下に、児童の精神の向上を図るいわゆる「徳育教育」をめざすのと同時に、身体の上昇、すなわち健康増進、および心肺機能を高め発音・発声を矯正して「正しく話す」技術を獲得するための訓練であるという面をもっていただことを忘れてはならない¹⁴⁾。

さらに、合衆国における音楽公教育は、教会音楽の改善の必要から生まれたものであったことも記しておく必要があるだろう。前述のとおり、ボストンを中心とした運動の開始は1830年代であり、明治維新に先だつこと40年足らず、当の合衆国自体もわずか建国40年の新生国家であった。旧大陸から移民が流入し、各地に町が形成されていく。町ごとに教会が――移民たちの出身地別に宗派は異なるのだが――建てられ、町の要となる。日曜ごとに礼拝が行われる。そのような状況下で、どのようにして会衆に適切に讃美歌を歌わせるかという音楽教育が、深刻な課題となったのである。同時に、児童の読み書きを教会が日曜学校というかたちで引き受け、これがやはり先述のペスタロッツ主義的「徳育教育」というもう一つの流れと合流することになる。これはもちろん、子どもの人権という新しいヒューマニズムに支えられた運動でありながら、同時に、神や祖国への愛、勤勉や進歩といった十九世紀的な価値観を教授することによって、子どもたちを「小国民」に仕立て上げる原動力ともなっていく。

音楽は、国家が人民の精神を掌握するのに強力な「武器」となりうる。決まった歌を連日歌わされていけば、否応なしにその曲なり詞なりが自分の血肉の一部と化していくだろう。その力に気づいたからこそ、近代日本という国民国家の創生期に、伊沢修二は文部省に対して「国歌」の必要性を訴えたのであり、後に台湾総督府の初代学務部長（1895-1897）となって、植民地においてまで唱歌教育を熱心に推進したのである。ただし伊沢は、その「武器」が逆手に取られる可能性を見落としていた。

4. 日本から韓国へ

「蛍の光」はやがて、東アジアに渡る。

大日本帝国が植民地を拡大していく過程において、現地の人々から母国語を奪い日本語を押しつける「国語教育」が推進され、当然の流れとして唱歌もその一端を担うこととなる。伊沢が赴任したのは台湾だが、もちろん台湾に限らず各地で、例えば朝鮮半島においても、「蛍の光」が教えられていった。

ところが、ここで一つの逆転が起こる。朝鮮半島では、「蛍の光」のメロディーにまったく別の歌詞がつけられ、なんと抗日愛国歌として歌われていたのである。

朝鮮半島にも、19世紀末にキリスト教宣教師たちによって讃美歌（チャンミガ）がもたらされ、布教とともに広まっていた。したがって、“Auld Lang Syne”の曲が受け入れられたのは、「蛍の光」

の旋律部分としてか、何らかの別の讃美歌の旋律部分としてか、どちらが先かということはまだ明らかになっていない。ともあれ、1896年、独立門の完成を祝って培材学堂（1886年創立、半島初のミッションスクールの一つ）の学生たちが斉唱したとされる「愛国歌」（エグクカ）の歌詞は次のとおりである。

愛国歌

聖子神孫五百年は わが皇室なり
山高水麗なる東半島は わが本国なり
無窮花三千里 華麗なる山河
朝鮮の民は朝鮮に 永久に栄えん

二千万は一心となりて 愛国を致さねば
土農工商の上下なく 己が職分を尽くさん

（朴燦鎬、『韓国歌謡史1895-1945』、晶文社、1987年 所収）

その後も「愛国歌」と名のつく歌は数多く書かれ、この歌も変遷を経て、現在の大韓民国国歌の歌詞となっている。

愛国歌（韓国国歌）

東海の海水と白頭山が乾き尽きるまで
神の守りたもう我が祖国万歳
無窮花三千里 華麗なる山河
大韓人よ大韓を永遠に保持せよ

南山の老松の鎧をまとうごとく
風霜に耐える我らが気性

広く高い秋空には雲一つなく
明るい月は我々の心

この気性とこの心で忠誠を尽くし
苦しかれ楽しかれ国を愛そう

(注：東海 日本海

白頭山 中国と北朝鮮の国境にある山，聖山とされる

無窮花 僅（むくげ）の花，朝鮮民族の象徴とされる

三千里 国土が三千朝鮮里に及ぶことにちなむ朝鮮の美称

(資料提供：大韓民国政府代表 <http://www.korea.go.kr> 他)

現在の韓国国歌は，“Auld Lang Syne”のメロディーで歌われていたこの愛国歌に，東京の国立音楽学校を卒業した作曲家，安益泰（アン・イクテ）（1911-）が1935年に曲をつけ，当時重慶にあった臨時政府が受け入れたものである¹⁶⁾。

朝鮮半島で，欧米起源の讃美歌や民謡のメロディを借りた愛国反日抗歌が，もっとも盛んに歌われたのは，日清戦争から日韓併合までの間（1884-1910）であるという。1902年，ドイツ人音楽家エッケルト¹⁷⁾が「大韓帝国愛国歌」を作曲するが，民衆に定着はせず，抗日愛国歌はますます勢を増していった。統監府（朝鮮総督府の前身）が「教科書用図書検定規定」を定めて歌の取り締まりに乗り出したにもかかわらず，もともと口伝えで広まっていた抗日歌に対してほとんどなすべがなかった¹⁸⁾。

ちなみに，「蛍の光」改め「愛国歌」は，現在でも韓国で唱歌として親しまれており，日本においてと同様，この歌がスコットランドに起源をもつことなど，あまり自覚されていないそうである。むしろ，韓国のナショナリズムを代表する歌として，「韓国映画では，日本の要人を暗殺する場面で必ずと言っていいほど使われるテーマ音楽」になっているという¹⁹⁾。

この事実から読み取れることは，少なくとも二つある。一つは，人は歴史的な知識の相違によって，同じ歌（曲）から「友情」「別れ」を連想することも，「民族愛」を呼び起こされることも可能であるということ。言い換えれば，「歌」は曲と詞という二面から成り立っていて，どちらの要素も不可欠なのだが，しかし，その詞の内容を「必然的に」規定するものは，厳密に言えば曲の側には内在しないということである。——もう一つは，歌とは，人心をコントロールする道具にもなりうる一方，抵抗の手段にもなる可能性をも秘めているということである。

5. 結論にかえて

“Auld Lang Syne”というひとつの歌の成立と受容を，200年の時の流れにそってたどってきた。行く先々でこのうたは親しまれ，その都度，その国「らしさ」といったものを負わせられてきた。スコットランド民謡であり，アメリカの風土にもなじみ，日本でも韓国でも土着の歌だと子どもたちに信じられているという，この歌の所属する先はいったいどこなのだろうか。

いや，そもそも，ある国「らしさ」とはいったい何なのだろうか。“Auld Lang Syne”のたどった運命を見る限り，そのようなものはフィクションである，ということができるかもしれない。「スコ

ットランド的」「アメリカ的」「日本的」あるいは「韓国的」といった何ものかが、統計や行動分析を通して得られないとは言い切れない。しかし、そういった「本質」はむしろ、そのような分析に先立ってあらかじめ指定されてあることのほうが、はるかに多いのではないだろうか。

18世紀のスコットランドには、イングランドやアイルランドに対してスコットランドの独自性を強く希求する力が働いていた。19世紀のアメリカは未だに国民文学と呼べるものを持たず、旧大陸の伝統に対して素朴な耕作人として立ったバーンズ像を、みずからの立場に引きよせて称揚する必要があった。近代国民国家として出発したばかりの19世紀末日本では、欧米列強との外交、および国民教育の両面から、国を象徴する音楽、「国歌」の創立が急がれた。そしてその日本に植民地支配を受けた朝鮮半島の人々は、圧政に耐え生き延びるために歌った。このすべてにかかわっていたのが“Auld Lang Syne”という小品だったということ自体は、歴史の偶然であろう。しかし、この歌をこのように押し流していった流れそのものは、けっして偶然でも不思議でもないのである。

象徴を求める欲望。ある物に——それが「歌」であれ、「旗」であれ、「鳥」や「花」や「風景」であれ——、みずからの所属する集団を「代表=表象 represent」させ、そうすることによってその集団の「独自性」を確認する、否、初めて「獲得」することへの欲望。その欲望の所産として「国民性」「民族性」はあり、あたかもそれらの交錯する網目に次々と落ち込むかのように、“Auld Lang Syne”は変転をとげてきた。たしかに、ベネディクトの言う「斉唱のイメージ」——「唱和の機会、想像の共同体を物理的共鳴のなかに現に体现する機会」¹⁹⁾のイメージから逃れることは、この21世紀初頭の日本においてはかぎりない困難をとまなう。しかし私は、その斉唱の抑圧をはねかえす別の歌声が、まだこの世界のどこかに残っていることを信じたい。

注

- 1) 岡地嶺、『ロバート・バーンズ：人・思想・時代』、開文社出版、1990年、190-193頁。
- 2) アラン・ラムジー（Allan Ramsey, 1686-1758）の「過ぎし日」（“Auld Lang Syne”, 1720）、17世紀の民謡（フランシス・センプル（Francis Sempill, ?-1683?）作か）、その他数篇のよく似た詩が残っており、バーンズに影響を与えたと思われる。岡地196-7頁。
- 3) エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、『創られた伝統』、前川啓治、梶原景昭他訳、紀伊國屋書店、1992年、30-31頁。
- 4) Donald A. Low ed., *Robert Burns: the Critical Heritage*, 1974. Routledge: London & New York, 1995, p351-393.
- 5) バーンズ・ナイトの成立時期には複数の説があるが、McGuirk に従った。Carol McGuirk ed., *Critical essays on Robert Burns*, New York: G. K. Hall & Co., 1998, p1.
- 6) Low, p44.
- 7) しかし実際は、ヨーロッパの伝統も同時代に「大量生産」されたものであった。エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、『創られた伝統』、前川啓治・梶原景昭他訳、紀伊國屋書店、1992年、p407-470。
- 8) Low, p14.
- 9) Low, p434-438.
- 10) Low, p439-440.
- 11) このように、ある曲に全く異なる歌詞がのせられたり、逆に同じ歌詞に違う曲がつけられたりするものは、も

英詩における賛美歌・聖歌・民謡

とも讃美歌ではごく普通にみられることである。しかしここで問題なのは、“Auld Lang Syne”の曲に讃美歌の歌詞がつけられたのが、日本に入ってきてからなのか、それともそれ以前にすでにアメリカで讃美歌としても歌われていたのかという点である。安田寛氏、大塚野百合氏はともに、『小学校唱歌』以前に『讃美歌并楽譜』に収められているという事実のみをもって「蛍の光」の曲の起源を讃美歌であるとしているが、この点はさらなる考察と調査が必要であると思われる。

- 12) 大塚野百合,『賛美歌と大作曲家たち—こころを癒す調べの秘密』,創元社,1998年,114頁。
- 13) 別の例を挙げれば,「蝶々」の歌詞の,現在は「さくらの花の 花から花へ」と歌われている部分は,明治唱歌では「さくらの花の, さかゆる御代に」であった。また,スコットランド民謡「スコットランドの釣鐘草 The Blue Bells of Scotland」の原詩は,戦地の恋人を思う内容だが,同じく稲垣千穎の手になる「うつくしき」という歌詞を与えられると,三人の息子を天皇のもとへ送り出した忠君愛国の母の歌になってしまう。(「うつくしき, わが子やいずこ。/うつくしき, わが長(かみ)の子は, /弓とりて, 君のみさきに, /勇みたちて, 別れゆきにけり。)」前掲『日本の唱歌(上) 明治篇』参照。
- 14) Sandra Wieland Howe, *Luther Whiting Mason: International Music Educator*, Warren, Michigan: Harmonie Park Press, 1997, p32.
- 15) 『朝鮮を知る事典』, 平凡社, 1994年増補版。
- 16) Franz Eckert (1852-1916) 現行の「君が代」の編曲者。メイソンの後任として音楽取調掛を務めた後, 朝鮮の李王朝宮廷音楽教師, 軍楽隊長となる。エッケルトの日本および韓国での活動については, 中村理平, 『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』, 刀水書房, 1993年, 235-363頁参照。
- 17) 朴成泰, 「韓国近代音楽教育史における『愛国唱歌教育運動』の意義——日本の対韓音楽教育政策を背景として」, 音楽教育学(日本音楽教育学会) 24 (2), 1994年, 38-40, 43-44頁。
- 18) 安田寛, 『日韓唱歌の源流—すると彼らは新しい歌をうたった』, 音楽之友社, 1999年, 31頁。
- 19) ベネディクト・アンダーソン, 『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』, 白石さや・白石隆訳, NTT 出版株式会社, 1997年, 238-239頁。

(みむら・あや 法学部専任講師)。